

第26回山片蟠桃賞受賞記念講演会（2019年6月17日）

「四季の創造 日本文化と自然観の系譜」講演録

ハルオ・シラネ 氏（アメリカ合衆国・コロンビア大学 東アジア言語・
文化学部 教授（日本文学・日本文化）、学部長）

これが日本語版の目次ですが、いろいろなトピックが入っています。本日はこの中から一つか二つ取り上げて講演させていただきます<図1>。

日本文学に自然と四季があまねく存在していることは、数えきれないほど多くの点で明らかです。『源氏物語』をひもとくだけで女性の登場人物の多くが藤壺、葵上、紫上、末摘花、朧月夜、花散里といったように、たいていは特定の季節と結びついた花や植物にちなんで名付けられていることが分かります。

実際、『源氏物語』を根本的に理解するためには、登場人物の名前ばかりではなく、人物が登場する背景にもなっている様々な植物、花、天象、天体がどのように文学的な意味を持っているのか理解することが必要です。

さらに、こうした植物や自然が連想させるものは、和歌が連想させるものと深く結びついています。『源氏物語』は日本文化と自然の密接なつながりを示す代表的な例として、よく取り上げられますが、『源氏物語』の時代、11世紀初頭の貴族女性が、女たちを外界から幾重にも隔てる几帳や御簾や障子の外へと、思い切って出ることほとんどありませんでした。

ごく稀に、近くの山や寺に詣でることはありましたが、ほとんどの場合、貴族女性が出会う自然は、彼女たちの住まいである寝殿の庭が自然であり、室内では絵巻物、屏風絵、襖絵などに描かれた自然をはじめ、彼女たちの詠む和歌に描かれた自然でした。

言い換えれば『源氏物語』と11世紀の貴族女性の生活には、自然が隅々にまで行き渡っていましたが、その多くは庭に造営されたり、家具や調度品や衣装、詩歌や絵物語の中に視覚的、テキスト的に描かれたものでした。

これは紫上が死ぬ直前の場面です<図2>。紫上が自分の命について、「おくと見るほどぞはかなき ともすれば 風にみだるる 萩のうは露」と和歌を詠む場面です。画面の左側の庭に萩があり、萩の露が紫上の命の比喻になっています<図3>。

こうした自然を私は「二次的自然」と呼んでいます。それは人間の世界と対立するというより、むしろその延長とみなされていました。そして、この二次的自然は何世紀にもわたり、特に都市的な環境において創り上げられたものでした。和歌が初めて季節ごとに分類されたのは天平年間に編纂された『万葉集』巻八と巻十ですが、二次的自然はこの頃から目立つようになります。都市化が進むにつれて、二次的自然が普及していったわけです。

日本人は生まれつき自然との親近性を持っていて、この親近性は日本文化の主たる特徴の一つであるという考えは、今日でも広く行き渡っています。高度な都市化とテクノロジーの時代にあっても保たれているこうした見方は、国語の教師用の指導書に収録されている「日本文学の特色」と題された、次のような文章に典型的に表れています。

「日本は農業国であり、日本人は農耕民族であった。農業は季節や天候に支配される。そのうえ、日本は気候が温暖で、四季がゆるやかに推移するという特色を持つ。西洋人が自然とたたかい、自然を克服しようとしたのに対し、日本人は、自然と共存し、自然と一体になることを願ってきた。このような風土から生まれた文学は、当然、自然との融合を重んじた。まず古代の和歌は、自然を細かく観察し、自然に心情を託することから出発した。この傾向は、平安時代に入ると、散文の世界にもひろまる。。。」『新総合図説国語』（2000年）

しかし、ここに描かれている日本人の自然との共存や調和は、一次的な自然との調和ではなく二次的自然との調和です。現実の自然とはかなり異なっています。

日本の気候は、現実には、小笠原高気圧により高温、多湿な期間が長く、台風や洪水などがよく発生します。確かに日本は農業国でしたが、農業は自然との調和というより、むしろ自然破壊を多くもたらしました。一つの例は、中世後期から近世前期にかけての禿げ山の現象です。全国的な現象です。実際の自然との乖離はともあれ、日本文学は自然と作者や読者との深い結びつきを表現している、とするこうした見方は、早くは10世紀初め、紀貫之による『古今集仮名序』に現れ、21世紀に至るまで、何世紀にもわたって繰り返されてきました。

自然との調和と国民性を結びつけることは、平安時代の初めから見られます。和歌という言葉は、一般的には「やまと」（大和、倭）の歌という意味です。「やまと」とは、もともと奈良盆地を指していましたが、平安時代までには「大和の国」、つまり当時、「日本」と考えられていた地域を意味するようになります。

また、和歌の「和」という言葉は柔らかさ、あるいは優しさを、さらに調和という意味も含むようになりました。この調和という意味を、藤原清輔が、『奥義抄』で発展させ、『毎月抄』（1219年頃）の中でさらに明確にしました。

「まづ歌はただ和国の風にて侍るうへ、先哲のくれぐれ書き置ける物にも、やさしく物あはれによむべき事とぞ見え侍るめ。げにいかにも恐ろしき物なれども、歌によみつれば、優に聞きなさるるたぐひぞ侍る。それに、もとよりやさしき花よ月よなどやうの物を恐ろしげによめらむは、何の詮か侍らむ。」

この文章が言わんとしているのは、優しく深く心を動かす和歌の本質は、すべてのものの調和がとれた国ぶりにあるということです。別の言い方をすれば、高位文化の価値が「優しさ」や「和」に置かれていたということです。ここで強調されているのは、自然とは何かではなく、自然はどうあるべきか、です。特に和歌においては、自然は優雅で上品な形式であるべきでした。

平安時代の和歌や関連するジャンルで発達した四季の文化は、日本の気候を反映したものであり、また、その裏返しでもあります。春と秋は穏やかな季節で、西ヨーロッパや北アメリカの沿岸地域の気候とよく似ていますが、長く厳しい二つの季節に挟まれています。

現在の暦では、夏は8月6日に終わりますが、実際の気候から言えば、京都の夏は少なくとも8月の末まで続きます。梅雨と梅雨明けの季節と8月の暑い気候を合わせると、夏が1年のうちほぼ3分の1を占めています。より大きな視点から見れば、実際には春と秋は寒い大陸性気候と暑い海洋性気候の間の過渡期に過ぎません。

簡潔に言えば、厳しい気候条件は、日本の気候は温暖で優雅な調和がとれていると広く信じられている見方とは著しく異なっています。実際の気候条件とは逆に、奈良時代や平安時代の貴族文化は、古代中国でそうであったように春と秋を最高の季節とし、文学や芸術で褒め称え、春と秋に関連する美的、宗教的、文化的連想を発展させました。こうした実際の季節と「四季の文化」のズレをたどっていくと、いくつかの要因が浮かび上がってきます。

古代や中世の京都の夏は実際には極度の暑さと疫病、そして、死の時期でした。そのため、都の各地域や宮中で葵祭や祇園祭のような祭が行われ、田舎では神々を鎮め、罪や災厄を祓う祭が数多く行われました。夏の持つこうした負の側面は、詩歌や王朝文化にふさわしい主題と見なされず、和歌、特に国家の調和がとれていることを表現することを目的とした勅撰和歌集の和歌に登場することはありませんでした。

平安時代の宮廷和歌は、現実の気候を映し出すのではなく、むしろ、高度に美化された理想的な四季を描いています。『古今集』をはじめとする平安時代の勅撰和歌集は、貴族的な価値観に合うように四季の最も魅力的な面を選び出しました。『古今集』では、春と秋にそれぞれ二巻が割り当てられ、春と秋が特に重視される一方で、夏と冬にはそれぞれ非常に短い巻が一つあるだけで、簡潔に描かれているのは、こうした自然のユートピア的な見方が反映されているからです。

平安時代に編纂された勅撰和歌集が非常に重視したこうした世界観は、私は「四季のイデオロギー」といえるものと密接に関連していると考えています。天皇が命じて天皇に献上された勅撰和歌集は、天皇の治世を言祝ぐものであり、自然界における調和と人間と自然との調和、天皇の支配のありようをそのまま反映するものでありました。

貴族文化では自然が護符（お守りのなもの）として用いられ、自然の脅威から身を守ることは、より美的な形をとりました。自然の中でも特に常緑樹やある種の動物は、こうしたお守りの力があると信じられていました。古代にはそうした力を人間に移転させる手段として、緑色の枝や幹や花のつぼみが集められ身体の上に置かれました。供え物として植物を捧げることは豊穡祈願、あるいは長寿を祈る手段であり、神道の儀式での榊の機能に非常によく似ています。

このような自然の護符的な機能は、中国の伝統における自然の表象、松、梅の木、菊、竹、鶴、亀にも見られます。それらは古代に伝来し、すぐに詩歌や絵画をはじめ様々な視覚文化において日本的に作り替えられました。自然の魔術的な機能はまた、五節句のような宮廷祭

事にも明らかに見てとれます。五節句はもともと豊穰の祈りや清めのための農耕儀礼に由来するものですが、1月1日の松、3月3日の桃、9月9日の菊のような自然のイメージが顕著であるため、宮廷における二次的自然に護符的なイメージを与えることにもなりました。その結果、極めて季節的で護符的な二次的自然が生み出されたのです。

もう一つの二次的自然、里山<図4、5>

日本文化には二次的自然の基本形態が二つあります。一つはこれまで述べたように都の貴族が発達させたものです。そして、もう一つは、平安中期から後期にかけて荘園の中の農村に現れた、「里山パラダイム」と私が呼ぶものです。この2種類の二次的自然は、平安時代から何度か交差し、室町時代には多くの文化ジャンルで重なり合うこととなります。

古代から日本人は原野を開墾し、稲作農業へと転換させてきました。古代に起こり平安時代から中世にかけて発達した荘園にとって、新田の開墾は最も重要なことでした。古代において未開地を田に変えていく過程では、人々は動物、魚、虫を殺すことを躊躇しませんでした。古代の風土記が明らかにしているように、野生の自然は危険で、しばしば人間に害をなす「荒ぶる神」と見なされていました。

『肥前国風土記』「^{さかのこおり}佐嘉郡」には次のように記されています。

「ある人いへらく、郡の西に川あり。名を佐嘉川といふ。鮎あり。その源は郡の北の山より出で、南に流れて海に入る。その川上に荒ぶる神ありて、往来の人、半ばを生かし、半ばを殺しき。」

ほかの例としては『古事記』や『日本書紀』に見られるヤマタノオロチ、有名な話ですが、ヤマタノオロチが穀物を駄目にして毎年村の若い娘を求めたものを、^{スサノオノミコト}須佐之男命が退治したという話があります。ヤマタノオロチは稲作に必要な豊かな水量の川と洪水の危険性を表象し、須佐之男は荒れ狂う川を治める力を表象する英雄の神となりました。

つまり古代においては、荒ぶる神と人間の世界との間には、はっきりとした境界が存在していました。自然の荒ぶる神と人間の世界は分離され、人間は荒ぶる神を敬い鎮めるために、周囲の山の麓に^{ほくら}祠や社を建てました。

しかし、平安時代の半ば以降、荘園において自然に対する態度に大きな変化が起きました。飯沼賢司氏が考古学的な発掘調査を通して示しているように、それまでの荒ぶる神の多くが稲作農業の神に姿を変えています。

こうした神々は水田、稲作農業にとって欠かせない水、堰、灌漑の神となり、さらに村の守り神、すなわちその土地を守り、「田遊び」のような儀式や豊作祈願を通して村人から崇拜される鎮守の神となりました。

このような神々を祀る神社は、村の端に建てられるのではなく、荘園の中に築かれるようになります。人間側から見てですが、こうして自然とのより協力的な相互共存的な関係へ移行した背景には、平安時代後期から中世にかけて、自然と農業に対してより大きな技術的な管理、特に治水と灌漑が出来るようになったことがありました。

こうした自然との新しい共同体的共存関係は、平安時代の中期から後期にかけて現れますが、これが現在、「里山」と言われるものの始まりで、20世紀まで続いた生態系でした。村人は川の近くに住み、川は水田の灌漑に用いられました。村人は水田ばかりではなく、周りの草地や雑木林からも収穫を得ました。そこからは田の肥料や牛や馬の飼料、建築資材、薪、燃料としての松の葉などを手に入れることができました。中世の説話や民話では、木こりなどの登場人物が、たいてい山に柴刈りに行きますが、これは薪を拾ったり肥料として下刈りや落ち葉を集めるために、藪や森に出かけることを意味する決まり文句です。

このように、里山の自然は水田と周囲の山から常に収穫が得られ、環境の循環処理や再利用が行われるような二次的自然の一つの形でした。しかし、それは都で見られるような優雅で小さくまとまった、花や鳥や虫が中心で色や香りを重視する二次的自然とは異なるものでした。

自然に対するこれらの二つの基本的な姿勢は、平安時代の物語や日記のような和歌に関するジャンルと、歴史書、説話、軍記物、お伽草子など、和歌を基盤としないジャンルとの違いにも見られます。

歴史書や『日本霊異記』や『今昔物語』などの説話集は、多くの動物、狼、狸、狐、兔、熊、猪、馬、牛、猿などを描いています。多くは狩りの獲物となったり、農作業で用いられた、あるいは里山に生息していた動物たちです。その一方で『古今集』をはじめとする平安時代の勅撰和歌集や王朝物語では、動物の世界は猫や犬のような愛玩動物や鹿、鳥のさえずり、虫の音にほぼ限定されています。

平安後期から中世における都を中心とした風景とは対比的に、里山の風景は『風土記』に見られるような古代の風景とあまり変わることなく、多くは農耕、狩猟、漁業と結びついた多種多様な神々で満ちていました。

里山の周りの山々は、神々が住むところと考えられています。農民たちは山の神は春先になると麓に下りて来て田の神となり、秋が来れば山の住まいに戻って行くと信じていました。

里山の農民は自然の猛威や自然のもたらす災禍、洪水、干ばつ、飢饉などと絶えず戦っていました。和歌の優雅な世界に見られる鳥や虫とは異なり、稲穂を食い荒らす多くの虫や鳥は厄介者と見なされていました。農民は田に害をなす動物や虫を殺す必要がありました。その結果、虫を含め殺された動物たちを鎮魂するという現象が、広く見られるようになりました。今もそれが続いています。

日本には昔から「虫送り」という伝統があります。私にとって非常に面白い現象です。村人たちは収穫に害をなす虫を退治するために、松明を灯し鉦や太鼓を打ち鳴らします。そして、その後で虫供養が行われます。同じような供養は鯨、魚、猪、鹿、その他、狩りで捕らえられた動物たちに対しても行われました。

数多くの中世説話、お伽草子や能が、自然を管理する必要があることと、数多くの神々がいる世界とされた自然を慰撫し、畏敬の念を表したいという願いとの間の根本的な対立を

明らかにしています。そして、これは仏教が浸透し、殺生（生きているものを殺すこと）を禁じたことにより、さらに複雑になります。殺生の罪は少なくともその一部は、供養や放生によって償うことができるとされました。

もう少し里山の枠を広げて、里山のコスモロジーに移ります。山の奥は異界とつながっていて、これは海についても同様で、山の麓に神社が建てられるように、浜辺にも神社が建てられています。そして鳥居が海を向いて建てられます。山や海は神々が住む「あの世」、あるいは大いなる力や財宝の源をそれぞれ表象しています。

寝殿造の庭における中島、すなわち、「常世の島」は、もともと神々の島、神々が降臨した場所と考えられていました。古代の貴族たちは神の力を得ようとするために、彼らの庭にミニチュアを置いていました。その伝統は江戸時代を経て、現在まで続いています。たいていは庭の中島の端に置かれている砂浜のイメージも護符的な機能を持っていました<図6、7>。この中島が蓬莱、すなわち不老不死の仙人が住む海に浮かぶ島という、中国のユートピア的なイメージと融合する場合があります。

都の寝殿の庭は虫の音や鳥のさえずりに焦点が置かれて、花鳥風月という言葉につながる二次的自然を特徴とするのに対して、田舎の里山は麦や米のような穀物、そして、鹿、狐、猪のような多種多様な半野生の動物という、農耕的環境を特徴としています。これら二つの風景はいくつかの重要な時点、特に室町時代に交差し、中世後期のお伽草子、能、狂言、俳諧には両者が混淆しているさまが見出されます。

具体例ですが、『宇治拾遺物語』の有名な話で、風がはげしく吹いて満開の桜の花が散っているところで、子どもが泣いている。お坊さんが近寄って、せっかく桜が咲いたのに散ったから泣いているかと問えば、子どもは農家の子で桜にはまったく関心がなく、「我が父の作りたる麦の花の散りて、実の入らざらん思ふが侘しき」と答えた、とあります。このように花鳥風月の文化と農耕文化が交差する逸話がよく出てきます。

宝井其角の俳句に、『平家物語』と『太平記』という二つの軍記物語を比較した句があります。「平家なり 太平記には 月を見ず。」宮廷的な花鳥風月が『平家物語』には見られるのに対して、南北朝の血生臭い戦いを描いた『太平記』には、そのような月は見られない、というわけです。

多くの中世後期の物語や能においては、和歌において中心的であった桜、梅、柳、藤、菊、松という優雅な樹木が、人間の霊や自然の神になって登場します。また、植物の擬人化と同時に、人間と動物や植物との結婚の物語が登場するようになります。もちろん前からそのような異類婚譚はありますが、非常に顕著になっています。そして、このような異類婚の物語では、たいてい、動物や植物は最後には人間と別れ、人間社会や環境に殺されてしまうのです。室町時代においては植物や動物、特に鶴、雁、菊のような和歌に詠まれていたものが、お伽草子や能に主人公として登場します。

これは恐らく都を基盤とする自然観と里山を基盤とする自然観が、室町時代に混淆した結果でしょう。とは言え、自然を「荒ぶる神」と見なした古代の自然観とは異なり、中世後

期の自然観は、より穏やかで自然に好意的であり、自然は人間に異性をもたらすものというよりも、むしろ犠牲者として自然を捉えています。

動植物が広く登場するようになったほかの理由としては、おそらく草木や土石、すべてが成仏するという「草木国土悉皆成仏^{そうもくこくどしつかいじょうぶつ}」説という、仏教的な信仰が広まったことが考えられるでしょう。この信仰は初めの天台宗に現れ、室町時代の新仏教に広がり、中世後期には広く浸透しています。

『日本霊異記』や平安後期の『今昔物語集』などの初期の説話のように、動物をより低い存在として見るのではなく、中世後期の仏教観では、あらゆる動物や植物は悟りを開き、成仏を遂げる可能性を秘めていました。この見方は特に『杜若』のような植物をめぐる能の多くに顕著です。そのような能では植物がシテとして登場し、悟りと救いを達成します<図8、9>。

物語や能に動物や植物が現れる理由として考えられるもう一つの理由は、環境の劇的な変化です。里山の環境史の見取り図です<図10>。平安以前は照葉樹林、檜を中心に木材として利用していましたが、平安以降、赤松林が増加し里山が成立する。そして、室町時代から江戸初期に、先ほど申しましたように、禿げ山現象が起こる。広重の『東海道五十三次』をよく見ると、ほぼすべてが禿げ山になっています。中世後期と江戸初期は大規模な都市の建設、新たな水田の拡張、過度の森林伐採、貧弱な環境保全によって、大規模な環境破壊が起こった時期でした。その結果、田舎の村で禿げ山が生まれ、動物たちが本来の生息地から追い出され、狼が人間を襲うようになりまして<図11、12>。

狼が人間を襲った結果、人間が野生の狼を絶滅させるという事態になり、野生の狼が日本から姿を消しました。中世後期の物語に多くの動物や植物が登場するのは、その当時かなりひどく破壊されていた自然を表すものとして用いられた結果と解釈できるかもしれません。

人間と動植物との生態系のバランスが崩れるにつれ、田舎の農村の動物や植物の霊は能に出てくる霊のように、敗北者の声として社会的、文学的に無意識に現れるようになります。多くの能は苦しみ死んでいった植物や動物の救済を願う祈りで終わりますが、それは明らかに死者たち、つまり傷ついた自然、特にもともとの生息地から追い出された動物たちや、当時急速に破壊されつつあった森林の霊を鎮魂する必要があったことを示しています。

13世紀初頭に始まる中世は、農民が新たな田畑を求めて木々を伐採し、日本で大規模な森林破壊が進んだ時期でした。中世説話が示しているように、森を切り拓きたい農民たちと、大木に宿る精に対する長年の信仰との間に、絶えず葛藤が起こりました。中世説話には二種類の森が登場します。一つは里山を取り囲み、山の麓に広がる赤松に代表される低木の雑木林です。この林は共同体の財産と考えられ、村人が肥料や建築資材、薪、その他、必需品として用いるため、絶えず伐採や採取を行なっていました。

もう一つの森は、山の奥深くに見られるもので、檜や椎、そのほかの広葉常緑樹が広がっていました。高くそびえるこれらの木々は神聖なものと考えられ、神が宿ると信じられていました。巨木を切るという話の多くは、里山の奥にそびえていたこうした木々に関するもの

です。

『今昔物語集』（12世紀初め）の最後の話は、象徴的な話ではないかという気がします。日光を遮る大木を切り倒す必要があった農民たちは、助けを求めて、しばしば天皇をはじめとする位の高い権力者に頼りました。この話では、近江の国の大きな^{ははそ}柞の木の影が災いして三つの郡では土地を耕すことができなかったので、農民たちは木を伐採する許可を天皇からもらおうと、躊躇することなくその木を切り倒します。そして、木を伐採したお陰で豊かな収穫がもたらされました。

こうした物語は富や豊かさをもたらす天皇の権威を高めますが、同時に天皇を使って森の神殺しを正当化しています。また、農民が大木を伐採することを恐れ、木の精、森の神の怒りを鎮めなくてはならないと感じていたことを明かしています。

こうした木の精の物語で最もよく知られているのは、『^{さんじゅうさんげんどうむなぎのゆらい}三十三間堂棟木由来』という作品です。これは宝歴年間に浄瑠璃として登場し、そのあと歌舞伎の演目として人気を博しました。主人公は熊野の山にある大きな柳の老木で、まさに切り倒されようとしていたところを、横曽根平太郎という位の低い武士に救われます。救われた木の精はお柳^{りゅう}という美しい女として現れ、平太郎と結婚して緑丸という子をもうけます。しかし、「横曽根平太郎^{すみか}住家」の場では、白河法皇が頭痛に悩まされており、法皇が熊野大権現の霊を見て、柳の木を棟木にして都に三十三間堂のお堂を建てれば頭痛が治る、と言われます。

法皇は熊野にあるその柳の大木を切り倒せという命令を出し、自らの死を悟ったお柳は、平太郎と緑丸に別れを告げて姿を消します。これは大阪の文楽です。お柳と平太郎と緑丸。柳の大木は切り倒され都まで運ばれてきますが、平太郎の家の前で突然動かなくなります。そこで緑丸が木にまたがって歌を歌うとようやく再び動き始め、やがて三十三間堂が完成します<図13、14、15、16>。

日本の神話では、人間と動物との異類婚は、通常「見るな」の禁忌が犯され、動物が人間に見られたときに終わりますが、人間と植物との多くの結婚の場合は、植物は枯れるか切り倒されてしまいます。歌舞伎の『三十三間堂棟木由来』について、河竹登志夫氏が次のように書いています。

「助けられた動物や植物が、美人に化けて恩返しをするという話は古くからあるパターンです。お伽話、作り話に違いありません。ですが、動物や植物、つまり私たちのまわりの“自然”にも心がある—という、昔からの日本人のやさしい“自然観”が、この物語には生きています。そうして、人間にもまさる夫婦、親子の愛情の細やかさ—。自然と人間の交流の中に、人間のあるべき姿が描かれる。それを舞台から感じ取っていただければうれしく思います。」

確かにお柳は献身的な妻であり愛情深い母親です。非情の柳、お柳は人間よりももっと深い心を持っています。しかし、このお柳の話の後ろには神殺しの問題が潜んでいます。

紀州熊野の山中は聖なる場所でした。^{くまのはやたまだいしや}熊野速玉大社<図17>、速玉大社の境内に、神木の^{なぎ}榊の大樹があります。熊野参詣の印として、榊の葉を守り袋に入れておくと災難除けにな

ると信じられています。この榎の大木と伐採された柳の大木は、もともと夫婦でした。お柳が言ったように、あの柳は榎と柳の連理の枝、幾年重ねし夫婦の契りだったのです。

三十三間堂の棟木を造るために、その神木を伐採したということは、要するに人間社会が薬や木材として使うために、大木に依存していることを物語っています。国家や仏教のために大木を破壊してしまう。中世の多くの能と同じように、『三十三間堂棟木由来』は鎮魂の役割を担っていて、非業の死や不当な死を遂げた神や精への祈りを捧げることが意図されています。さらにこの演劇には、犠牲になる大木に庶民が同情、共感し、鎮魂を求めることが現れています。

歴史的に見ても日本は寝殿造や書院造、神社、仏閣、城、御所などの伝統建築において、多くの木材消費をしてきました。758年、奈良の東大寺建立の際に、この地域で最初の大規模な山林伐採が行われました。木材は実際、日本建築やデザインの「自然豊かな」外観に不可欠な要素であり、人間と自然の調和という感覚に大きく寄与しています。しかし、大量の木材消費は、森の伐採の必要性和、そうした行為が引き起こす不安や恐れとの間に絶えず緊張をもたらしました。大木を切り倒す話が出てくる様々な物語は、樹木の破壊への抵抗感とともに、そうした破壊行為の合法化と正当化を表しています。『三十三間堂棟木由来』では、「柳はたちまち切り倒され枯れ木となれば、まず成仏」するという仏教的な解釈になっています。

以上、日本における「自然との調和」という概念の系譜をたどってきました。今日でも広く浸透しているこの概念は、奈良時代に始まる都市の貴族文化にさかのぼることができます。そして、この都市の理想としての二次的自然と、平安時代後期に現れた別の形の二次的自然である里山とを、対比させつつ論じました。

これまで見てきたように、里山の重要な特徴の一つは、自然における聖なる存在に対する信仰です。この信仰は、すべての植物や動物に仏性が内在するという新しい仏教概念と相まって、自然に対する態度、特に怒れる自然に対する畏れと豊かな自然に対する敬いの念に大きな影響を与えました。都を中心とする二次的自然と、里山を中心とする二次的自然とのつながりは、複雑な方法で相互に影響し合いながら今日まで続いているのです。

ご静聴ありがとうございました。